

には、親に聞いたり相談したりして、準備しなくてはなりません。「Show and Tell」は5才の幼児が発表するだけでなく、それを聞く相手があり、ときには質問される立場にありますから、あまり難しいことはできません。親子の間では当たり前の行事、知識やカルチャーを、誰にとっても分かりやすくするため、子どもも親も頭を悩ませることになります。我家の子ども達が選んだのは「折り紙」です。

日本の家屋が、基本的に木造建てで、障子は紙でできた文化であると紹介します。それを聞いた子ども達は、紙でドアを作っている日本にびっくりします。また、15センチの正方形の紙が鶴に変化していく過程を、デモンストレーションを見ることで、さらに日本の文化に興味を持ってくれます。その結果、その日本の文化をアメリカではどんなふうに役立てるのかと、子どもから質問を受けたことがあります。あちこちから、「私なら」、「僕なら」といういろんなアイデアが上がりました。(ご存知でしょうが、宇宙衛星の翼が折りたたみ式なのは、折り紙からヒントを得たというのは有名な話です。)これが、いろんな国のカルチャーから得られるなら、キンダーから小さな目と芽を作っていて、娘たちもアメリカのDiversityを担う、まさに芽の一つなのだと、感じたのです。

<この指とまれ>

Aideの先生やボランティアのお母さんの手伝いがあったても、一人の先生で30人もの5才児を、アカデミックな教育に集中させるのは大変な仕事です。大人の理屈を言うと屁理屈で返せるお年頃の子どもがいたり、外国から来たばかりで英語が通じなかったり、隣ばかりが気になって注意散漫な子どもがいたり、ちっとも話を聞かないワンパクがいたり、おしゃべりがやめられない子どもがいたり、じっと席に座ってられない子どもがいたり、想像するだけでも疲れます。それは、日本の学校でも例外ではありません。

数年前、東京の赤坂のある小学校の3・4年生のクラスで行われた、英語のデモ授業に参加したことがあります。その結果、授業の内容を評価する以前に、生徒の私語に対して「しずかに」「やめなさい」と注意することたびたびで、授業のほとんどはその印象で費やされてしまいました。日本では、「口で言えば分かる」という、口頭での指導が伝統なのでしょう。

娘のキンダーの先生は、一つの例に過ぎませんが、どのような方法で子どもを指導していたか、ご紹介します。先生は日米のバイリンガルでMrs. Nakataniと言い、日本から来たばかりの子どもが三分の一というクラスの担任をしていました。それで、英語ができない子どものために、「この指とまれ」とい

うルールを教えてきたようです。それは簡単で、「先生に注目」という意味で、口に指を当て「シーツ」、人差し指一本を高く上げて近くの子どもの肩をたたくのです。肩を叩かれた子どもは自分がどんなことをしていてもすぐに止め、先生と同じように黙って指を高く上げ、次の子どもへ同じ合図を送ります。「指」が上がったら「とまれ(やめる)」なのです。その後はもうドミノ倒しの要領で、全員が先生を注目するまで指を上げ続けます。こうして、一人ひとりに明確なルールで従わせていたのです。あっという間に静かになったキンダーの子どもを見て、「道具(ルール?それとも指?)」は使いようと、感動すらしました。

<Kindergartener>

我が家の子ども達は、小学校は日本人の多く住む学校区で低学年から始め、高学年はいろいろなカルチャーを背景にした子どもや大人達の中でもまれ、そして、中・高校はカルフォルニア州でも保守的な郊外で、アメリカでも質の高いと言われた教育を受けて修了しました。

成人した娘たちを見てみると、私の知る限りでは、四半世紀(25年)前にPledgeや世界地図から受けた印象通り、多くの国のカルチャーに対する理解が深いように感じます。その基礎は、キンダーガーデンの教室で培われたのだという思いと、そういう環境にあって、わが子はアメリカ育ちや生まれでありながら、自分のルーツは日本ということで、二つの国を自分のアイデンティティとして享受している、と感じます。

<Classroom>

先日、娘の家で開かれたBBQパーティに呼ばれてみれば、会社の同僚たちとのウィークエンド・パーティを兼ねていて、大騒ぎの真只中でした。集った人たちを見ると、時を越え、場所は変わっても、様々な文化・国を背景にした人ばかりです。「キンダーガーデンの教室と大して変わらないなあ」と、つい思わず「この指とまれ!」しそうに・・・。

松本 康子 (まつもと やすこ)

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の姿を紹介させていただきます。

皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか?



多様性(diversity)は、アメリカ社会が大切にするものの一つです。しかし、多様な人たちや考えの違いをまとめ、乗り越えて行動するために、様々な工夫・仕掛け・約束が作られています。

「この指とまれ」は、教室の中の約束事の一つです。お子さんが、そのルールをどのようにとらえているか、そっと聞いてみませんか?